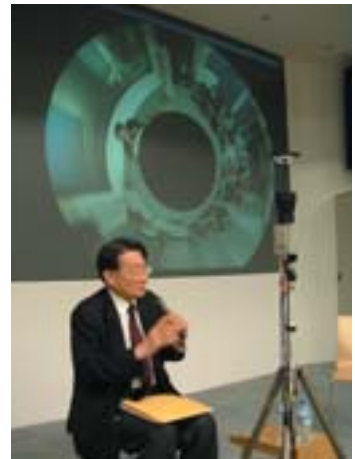


NEWS

2003.4 ~
2003.7



石井威望講演会

美術研究科先端芸術専攻 修士課程設置

桂英史

この大学院にいったい誰が来るんですか。霞ヶ関のヒアリングで遭遇したお歴々は、その質問した。質問も質問であるが、答も答だった。必ず多くの人が関心を持ってくれるはずです。その美、そう返答した私自身にも論理的な説明をできるだけの根拠は持ち合わせていなかった。講座制を採用しない。研究室単位での対応をしない。組織らしいものがあるとするれば、それは先端芸術表現専攻という枠組みだけ。

このような大胆な仕組みを構想した背景には、何といっても私たち二名の教官構成とそれを支えてくれるファカルティメンバー（助手や講師の人たち）が擁しているポテンシ

ヤルがある。そのポテンシャルをさらに修士課程で開花させるべく、ここ四年の間に先端芸術表現科で得てきた経験や知見をさらに先鋭化させ、「地域と芸術」「コミュニケーション・デザイン」「言語と身体」「科学技術と表現」「素材と創造性」というプロジェクト領域を設定することとした。このプロジェクト領域は、あくまで暫定的なものである。二年後には全く異なる教育研究組織となっているかもしれない。

アートの領域にあつて、「専攻」や「専門」は普遍的であるはずもなく、常に時代とともにあることは言つまでもない。アートの領域は、ある意味で経済や技術などの分野以上に、

交流

外国人留学生との懇談会を開催

五月十五日、学生会館内学生食堂において、留学生と関係教職員、チューターとの懇談会を行った。謝辞はステープ・ドミニク・エレリ（音楽・博士後期課程二年、イギリス）さんが九五名の留学生を代表して述べた。交流を通じ、相互理解を深めることを目的として毎年開催している。

神田祭に学生、卒業生が参加

五月十日、江戸開府四百年を記念しての大祭となった神田祭に、昨年の本学芸術祭で学生が制作した「みこし」四基（山車）とサンパチームが、また、邦楽科卒業生グループによる長唄などで、江戸時代に流行した粹でないせな幻の「底抜け屋台」を復活させ、総勢約七名が参加した。沿道からは絶え間ない拍手と熱い声援を受けていた。



四芸祭、活発な学生間交流

四芸祭大学体育・文化交流会が五月十二日から二十五日まで、京都市立芸術大学において行われた。今年は四十九回。両学部学生、計一七名が参加した。文化事業では、合同展覧会や演奏会、小・中学生を対象としたワークショップなどが行われた。

受章・受賞

芸術院賞に

前学長澄川喜一名誉教授

平成十五年六月一日、前学長の澄川喜一名誉教授が平成十四年度（第五十九回）恩賜賞・日本芸術院賞を受賞された。

野田哲也教授紫綬褒章受章

平成十五年春の褒章において、野田哲也教授（木版画）が紫綬褒章を受章された。

春の叙勲、

三浦小平二名誉教授が受章

平成十五年春の叙勲において、本学関係者では、人間国宝の三浦小平二名誉教授（陶芸）が勲四等旭日小綬章を受章された。

運営

三笠宮殿下に名誉客員教授の称号

本学では、芸術並びに教育に貢献した者に名誉客員教授の称号を授与している。このたび、昭和六十年から平成十四年度までの長きに渡って、美術学部客員教

時代精神を如実に反映した実践でなければならぬ。もちろん、実践的であることや柔軟であることを目指している大学は、世の中にたくさんある。しかしながら、実際に実践が大学という教育の場で特別な意味をもっている所は少ない。大学という場が学生個人の資質や才能に影響を与えるという考え方は、国立大学の独立行政法人化が目前に迫った現在さらに重要になってくる。どこにでもある「場」では、日本の大学は国際競争力を失い、その役割がさらに小さくなってしまつていない。大学の自治は「場」のあり方が特有であり続けることによって可能になる。このよ



1 week trial

うな特有な「場」にとつて、何よりも「人的資源」は重要である。

幸い、本年度入学した二八名の第一期生は「場」のあり方という重要なテーマに取り組み学内外に影響を与えることのできる資質や才能に溢れている。この特有な「場」がアートの領域に限らず、広く深く社会や生活の隅々に対していろいろな意味で影響を与えることのできる教育研究が実践される場合は、世界中どこを探してもこんなアートスクールはない今のところ、そう自信できる。
（かつら・えいし／美術学部先端芸術表現科助教）



IMA演習

授として「古代オリエント美術史」に関する講義を受け持たれていた三笠宮崇仁親王殿下に名誉客員教授の称号をお贈りした。

殿下は、古代オリエント史の第一級の研究者として知られ、多くの著書は、我が国の古代オリエント研究の水準を飛躍的に高めたとして評価されている。

本学においては、美術教育の講座で人間と文化や芸術との関わりを授業で展開された。興味深いテーマと数多くの発掘調査をふまえた実証的資料の提示、深い教養と新しい知見の披露などは、本学の学生だけでなく卒業生や外部の方々の聴講をみることに、本学の美術教育の発展に貴重な貢献をされた。



平成十五年度入学式を挙行 奏楽に感慨無量

四月十日に学部 大学院、四月二十一日には本年度から大学院美術研究科に設

置された先端芸術表現専攻の入学式が奏楽堂において挙行された。美術学部は、志願者五二一八名のなかから二五一名が、また、音楽学部は、志願者九六四名のなかから二五一名の難関を潜り抜けた学部学生と大学院生三六六名、音楽別科生三名計八九九名（先端・院生は二八名）の新生がそれぞれの歓びを抱いて参列した。本学ならではの奏楽で始まり、平山学長から新入生に対して入学許可の告知のあと、式辞が述べられ、奏楽で結んだ。奏楽は、音楽学部各科の持ち回りで今回は管・打楽器専攻により行われた。また、四月九日には音楽学部附属音楽高等学校入学式が高校内ホールにおいて行われた。高校も在校生による奏楽が行われている。

韓国国立中央博物館所蔵 「日本近代美術展」の 入場者七万人

四月三日から五月十一日まで大学美術館で開催された「日本近代美術展」は、期間中七万人を超える入場者があり、盛況のうちに終了した。同展覧会は、韓国国立中央博物館に所蔵されている日本の近代美術品約二 点のなかから、日本画、工芸作品計七 点が展示された。これらの作品には、横山大観をはじめ芸大の前身である東京美術学校出身の作家が多く含まれ、実に半世紀の時の流れを越えての里帰りであった。

ガラス造形工房開設

六月十九日、取手校地において、四月に開設したガラス工芸講座の電気炉に火を入れるため、これからの作業と制作の安全を祈願する開所式が行われた。